第50回　厚木市広報写真コンクール　審査結果

一般部門

市長賞

「待ち望んだ鮎まつり」　町野正樹さん

講　評

市民が待ち望んでいた久しぶりの鮎まつり花火大会。
美しい花火を中心に会場全体の様子を余すことなく捉えている。2段に打ち上がった花火、水面の反射と煙も会場の雰囲気を盛り上げた。露店が並ぶ河岸の灯りが花火を温かく包んで画面全体をまとめ、会場のスケールも見せてくれている。遠くに圏央道が延びている。アクセントになった。

神奈川新聞社賞

「雪遊び」

高梨雅史さん

講　評

今年1月の冷え込みは記憶に新しいが、昨年も1月6日、県内で雪が降った。7日の神奈川新聞には「雪のため配達が遅れる場合もあります」とおことわりが載った。白く彩られた厚木市のぼうさいの丘公園で、思いっきり雪玉を投げる男の子。宙を飛ぶ雪玉と男の子のうれしそうな表情をとらえ、家族で思い切り雪を楽しんだ様子が伝わってくる。

観光協会賞

「大道芸クライマックス」

山本雄二さん

講　評

演技が佳境に入り盛り上がった一瞬を巧みなフレーミングで捉えた。大道芸のクライマックス。口から噴き出た炎が絶妙の瞬間。一番の見せ所だ。演技者と観客が一体となった瞬間でもある。手前に観客を入れたことで演者の周りをぐるりと取り巻いているその場の様子が伝わってくる。

入　選

「暖かいね」

関口通規さん

講　評

2体の子ども石仏に魅了される。桜の花びらに囲まれて微笑みあっている。観る人にここに行ってみたいと思わせる作品だ。かわいい石仏には心が傾いてしまう。石像の表情を生かした構図。やや見上げるようにカメラポジションを下げたことにより可愛らしさが引き立った。

「花道」

西山昌敏さん

講　評

無駄なものは入れないすっきりした構図。新緑の中に赤と桃色の花々、その場に訪れた2人連れ、美しさに魅了されていると感じる。一面に広がる花々が二人の視線の先に拡がっている。広大な花園を想像させる素晴らしい場所だ。四季折々の情景を楽しみに訪れてみたい。

「眩しい青春」

内野秀明さん

講　評

青春時代の思い出を残そうとスマホで撮影するふたりの気持ちが仕草から伝わってくる。高校生活の一コマ、二人には思い出と記念の一枚になったと思う。高校生の作品と思っていたが、審査後に高校の先生と聞いてびっくりした。生徒たちとの信頼がなければこんな近くでは撮れない。作家も微笑みながらシャッターを切ったと思う。

入　選

「街の彩り」

大坪政文さん

講　評

森の里地区の住宅地、家々の屋根の彩りが鮮やかだ。緑に囲まれた色とりどりの屋根の一軒一軒に楽しい家庭を想像させる。この屋根の下で多くの市民の楽しい暮らし、豊かな暮らしがある。郊外には多くの市民が暮らす住宅地がある。厚木市のイメージを屋根の彩りで表現した。厚木市が誰もが住みやすい場所になって欲しい。

「端午の風」

戸塚正夫さん

講　評

春の風にあおられる鯉のぼりたちの躍動する瞬間を捉えている。思い思いに舞う鯉のぼりたちが生きているようだ。散策する市民の姿が少ないのは寂しいが次の機会には鯉のぼりを楽しむ市民を入れて撮ってほしい。市民の姿があることで更に身近で親しみのある作品になると思う。

「雨上がりのヘビイチゴつみ」

飯田ひろかさん

講　評

相模川に近い広場の草地で、男の子が草の中に見つけた真っ赤なヘビイチゴの実。雨上がりの水滴を帯びた緑の中で、鮮やかなヘビイチゴの実は、男の子の目に宝石のように映ったことだろう。何気ない家族の一コマは、愛情に包まれた温かな記憶となって残るに違いない。

「ピカピカの一年生」

伊藤和馬さん

講　評

子どもたちに対する愛情が伝わってくる。春の入学シーズンは桜が似合う。満開の桜の下に並ぶ子どもたち。一人ひとりの笑顔を想像できる。新しいランドセルを背負う子どもたちの前方は広く広がり遮る物はない。背負うランドセルには夢と希望に満ちている。桜が子どもたちの前途を祝福している。明日に向かって夢を描いて小学校に通って欲しい。

審査員奨励賞

「夕日をのぞむ」

田中亮さん

講　評

その場で水たまりを見つけたことが一番、そしてその水たまりを生かして撮った。この写真の評価はその一点にある。発見することが写真撮影の第一歩。発見が写真の表現を拡げてくれる。放課後、夕焼け空の大山をバックに四方に散った友人たちの楽しむ姿は良い思い出になる。

「ぼくらのNew　Face」

杉原陽菜さん

講　評

躍動感を見せるために斜めにした表現を試みた。宙に浮く素晴らしいタイミングでシャッターが押された。手前の仲間たちの影を更に入れることによりタイトルに合った一体感が増したと思う。正面からストレートに撮って自分の思いを表現する。形ではなくストーリーが語れる写真を目指して欲しい。

総　評

コロナの影響か応募作品がテーマ、ジャンル、場所等の幅が狭かった。市内各地区での行事関連の作品がほとんどなかった。その中で久しぶりに開催された鮎まつりの花火の作品に秀作が多く寄せられた。どの作品も市長賞に相応しい作品であったが、より多く市民の活動や魅力ある景色を拾い出したいとの思いからテーマごとに1点として選考した。広報写真コンクールは上手な写真を選ぶのではなく、募集テーマに沿って表現されているかだと思う。写真は日常生活に密着している。多くの方がカメラやスマホを持っている。日々の中で出会った日常の出来事を写真で簡単に記録し表現することができる。来年はより広範なテーマと場所、市民活動の様子の作品が応募されることを願っている。この場所に行ってみたい、イベントに出掛けてみたい、と思ってもらえる作品を期待しています。